

学習スタイルによる最適な外国語 e-Learning 教材の選定に関する検討

梶浦 美咲

近年、ICT の普及により、従来の紙媒体の教材のみならず、デジタル機器を用いた多様な形態の教材が提供されるようになった。一方で、その教材を使用する学習者も多様である。その中で、教育心理学の分野においては適性処遇交互作用という概念で、個人特性毎に適した教材を提供すべきことが指摘されてきた。そこで本研究では、個人特性の中の、特に学習スタイルに注目して、どのような学習スタイルの学習者にどのような外国語 e-Learning 教材が適しているのかを検討した。

学習スタイルには、FLEDER の学習スタイルモデルの＜活動的-内省的＞軸を採用した。活動的学習者は総じて学習意欲が低い傾向にあり、インタラクションを組み込んだ動機付け効果のある e-Learning 教材（学習意欲喚起型）の方が適切なのではないか、一方、内省的学習者は総じて学習意欲が高い傾向にあり、紙教材のようなアナログデータを単にデジタル化しただけの e-Learning 教材（学習量重視型）でも、同程度に適切なのではないか、と仮説を立てた。

そこで、本研究では、教材の適性を学習所要時間という観点から検討することとし、上述の仮説を検証するために実験を行った。まず「学習スタイル調査」によって判定された活動的学習者と内省的学習者に、「普段の学習意欲」、「中国語への興味」を自己評価してもらった。次に、学習意欲喚起型の中国語 e-Learning 教材と学習量重視型の中国語 e-Learning 教材を、指定した学習範囲に従って学習してもらい、その学習所要時間を計測した。両教材使用後は、教材を使用した際に感じた「学習意欲」、「また学習したいか」、「集中力」を被験者に評価してもらった。

実験の結果、活動的学習者は、有意水準 10%ではあるが、学習量重視型よりも学習意欲喚起型の e-Learning 教材のほうが短時間で学習内容を習得できることが分かった。よって、外国語の自律学習をさせる場合、活動的学習者には、学習意欲喚起型 e-Learning 教材を提供することが、学習を効率化する上で有効であると考えられる。一方、内省的学習者においては、両教材で学習所要時間に有意差はみられなかった。しかし、活動的学習者と違い、内省的学習者は、学習意欲喚起型 e-Learning 教材で学習した際の「学習意欲」を有意水準 10%で高く評価していたことも分かった。よって、内省的学習者には学習量重視型の外国語 e-Learning 教材を提供しても、同程度の時間で学習内容を習得させることができる可能性があることが示唆されたが、「学習意欲」を高めるという観点に立てば、内省的学習者にも学習意欲喚起型の外国語 e-Learning 教材が適していると考えられる。

今回の実験では十分な被験者数を確保できなかった。よって、実験結果を安易に一般化することができない。今後被験者を増やして再度検証する必要がある。

(指導教員 中山伸一)